

### リアルでもオンラインでもつながっている学会へ



OR学会会長：中央大学 教授 田口 東

2020年度から会長をつとめることになりました田口東です。1974年に工学部を卒業して企業に2年半勤務し、大学助手から始めて現在まで教育と研究に携わってまいりました。その間、自分自身の好奇心と実現可能な範囲で社会的な現象の数理モデルを作り、それらの課題に対する解を考えることを行ってきました。交通システムを扱うことが多いのは、人の移動が興味深いことと、長期間に亘る実際のデータが入手しやすいことによります。まわりからは鉄分が濃いからとも言われております。さて、これまで大きな研究プロジェクトに参加した経験もなく、オペレーションズ・リサーチの狭い分野しか理解していないところで、会の運営の方向性を示して進めて行くとなると、ひとりの力では難しいことは十分に理解しております。今までの学会の歴史を勉強し、適切に意見をうかがい、情勢を判断しながら進めて行きたいと考えておりますので、どうぞご協力をよろしくお願い申し上げます。

年が明けてから新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のために、社会的な活動をこれまでの形で進めることが非常に難しくなっております。第一に、会員の皆様が所属される組織の活動を維持することに多くの労力を費やされていると思いますし、従来型の学会活動の参加に割ける時間は少なくなって当然です。そのような中でもそれぞれの立場におけるオペレーションズ・リサーチの研究と実践は是非続けていただきたいと願っております。

学会活動への期待の中で、オペレーションズ・リサーチに関わる会員の研究活動・技術的知見に関する情報の発信と収集、興味のある分野における意見交換、新しいテーマを見いだすヒントを得ることは、非常に高い位置にあると考えます。それらに対して、機関誌、論文誌、研究発表会、シンポジウム、セミナー、研究部会を通して、比較的まとまった内容から萌芽的なもの、また啓蒙的な話題などそれぞれ適した機会が提供されています。これらの活動の中で研究発表会、研究

部会、シンポジウムで「リアルな移動」と「濃厚接触」を通じた研究の活性化、高度化を図る場面は重要です。しかしそれらは強い制約をうけることとなります。一方、これまでリアルな活動の活発さと比較して、ホームページ、インターネットを使った情報の流通がかなり遅れており、学会活動の活性化に向けてこの課題を解決する必要があるという指摘がなされてきました。現在の情勢を考えますとこの観点の重要性は非常に高くなっていますし、感染が収束するまで「表にでる」活動が制約されることを考えると、さまざまな活動のオンライン化を視野に入れながらこれに力を注ぐことは理にかなっているといえます。しかし、言うのは簡単ですが、個々の活動を考えれば良いのではなく、研究普及、出版編集、広報、支部のそれぞれの活動と学会活動全般の中心にある事務局運営に深く関係する内容ですから、丁寧に進める必要があると考えています。当面は、可能な活動のレベルは落とさないように、ホームページを通じた迅速で的確な情報の発信から始めて、人のネットワークを通信のネットワークに重ねられるようなシステムを作りながら進めたいと考えております。1年間でなんとか体制を整え、その後学会の方向性を議論できる時期が来ることを心から願っております。

最後に会員としての期待を述べます。まだ記憶に強く残っている東日本大震災の後には、課題解決の学問であるオペレーションズ・リサーチを使って社会への提案を発信するという企画がなされました。また、すっかり影が薄くなってしまった東京2020オリンピック・パラリンピックに対して、課題を探り解の提案を目指して研究部会活動が行われました。現在感染拡大防止のために行動変容を強く訴えられている西浦博先生の論文が2009年の和文論文誌に掲載されています。新型コロナウイルス感染症の問題に対しても上記のような活動が生まれると、暗い話が多い中に日が差すのではないのでしょうか。